（別紙　2）

論文審査の結果の要旨

氏名　　佐藤　文郎

20世紀初頭フランスのフォービスムやキュビスムなど、前衛芸術運動に指導的役割を果たし、第一次世界大戦後のシュルレアリスム運動に深い影響をあたえたギヨーム・アポリネール（1880－1918）は、文学史的には最後の恋愛抒情詩人とも、あるいは句読点の排除やカリグラムなどの新たな詩的冒険によって現代詩の祖とも呼ばれ、いわば両世紀間にまたがる新旧文芸橋渡しの役割を担わされてきた。従来の研究は、ともすれば恋人探し的な伝記的側面に偏し、あるいは新奇を好む文芸批評家の役割が強調され、詩人固有の文芸思想面の研究が、十分になされてきたとは言い難い。

「アポリネール表象理論の探求」と題された本論文は、「鏡」と「異端」というテーマを鍵にして、詩作品を中心とする丹念なテクスト読解から、詩人本来の文芸創作理論を抽出し、実在に対する仮象（写像）の優位、創造主に対する被造物の卓越という、芸術創造行為における因果関係の逆転と、価値転倒による新たなレアリスムを提起せんする新鮮な詩人像を示す。論考は六章に分かれ、最初の二章ではアポリネールにおける鏡面の設定と自己投影の様態を示す。続く二章では自己投影の神話的・宗教的側面を分析し、一方にナルシス神話、他方に創造主（神）を被造物（人間）の似姿としてみる神人同形論の異端思想を、詩人の表象理論の特質として提起する。最後の二章では「類似性」および「レアリテ」という表象論の根本命題を通して、アポリネール表象理論の全体像を総合し、実物（オリジナル）よりは写像（コピー）を称揚し、詩人の作中における自己投影像こそが創造主の位置を占めるとする、価値転倒の表象理論を導き出す。

極めて野心的な本論文は、広汎かつ丹念なテクスト読解に立脚するとはいえ、芸術批評関連テクストとの照合や、概念及び仮説の検証が未だ十分ではなく、アポリネールの画期的な表象理論が同時代の芸術家たちにどのように受容され、いかに新芸術運動を導くにいたったかの考察も、今後の課題として残されている。とはいえ、本論文はアポリネールの本格的な文芸思想研究の新機軸を示すものであり、今後の20世紀文芸思潮研究に大いに寄与するものと確信する。以上から、本審査委員会は、本論文が博士（文学）の学位に相当するものと判断する。